

大正・昭和期の雑誌における看護の記述 雑誌『婦人之友』の紙上講習「家庭看護法」を題材に

荻原 順子

新潟青陵大学福祉心理学科

Description of the nursing in the magazine in Taisho and Showa era
The training course in the report of “ domestic nursing method ”
extracted from “ FUJIN-NO-TOMO ”

Junko Ebara

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

This paper analyzed the articles extracted from “ FUJIN-NO-TOMO ” that had been published in 1903. It reveals the nursing method's general condition of the enlightenment education in Taisho and Showa era. The training course in the report of “ domestic nursing method ” observed the basis of the nursing that has relevance to the present, and also the evidence of art of nursing. This idea were influenced by Tomoko Hani, editor of “ FUJIN-NO-TOMO ”

Key words

‘ FUJIN-NO-TOMO ’ training course of Carrying home nursing Motoko Hani

要 旨

1903年（明治36年）創刊の『婦人之友』の看護の記事をとりだし分析する。そのことにより、大正・昭和期における看護法の啓蒙教育の概況を明らかにする。紙上講習「家庭看護法」では今の時代にも通じる看護の基本が述べられており、技術の裏づけも述べられていた。その表現方法には『婦人之友』を編集した羽仁もと子の影響があった。

キーワード

婦人之友 紙上講習 家庭看護 羽仁もと子

はじめに

「介護」及び「看護」は、昔から家庭で自然に営まれてきた行為であったが、看護は早くから専門的職業として存在してきた。看護の職業としての発展は家庭の看護にも影響を与えている。筆者は介護という言葉が一般的に使われていなかった時代、今のような長寿でなかった時代に専門的な知識としての看護がどのように伝えられてきたか、そしてその家庭看護の技術を普及させてきた啓蒙的役割を検討してきた。その成果は「明治以降の看護の啓蒙教育 - 「家庭看護書」の変遷を通して - 」¹に取りまとめてきたところである。

本稿はこれまでの作業の継続である。これまでの作業と同じように教育側の視点から検討を試みたい。すなわち時代の持つ共通性に着目しつつ執筆意図、技術の内容から考察することを目的とした。

資料と方法

(1) 資料

明治・大正・昭和時代の『家庭看護』の内容を裏づけるため、女性向け雑誌として農村の女性を対象にした雑誌『家の光』、都会の女性を対象にした雑誌『婦人之友』から介護に関する記述を見た。

『家の光』は大正14年に創刊された農家向けの家庭総合雑誌であったが、農業の記事と共に家庭料理、衛生、芸能、読物、時事関連と多彩な内容であった。『婦人之友』は、1903年(明治36年)ジャーナリスト羽仁吉一、

初の女性新聞記者羽仁もと子による雑誌『家庭之友』から始まった。生活を愛する気持ちとよい家庭がよい社会を創るという信念は、現在も受け継がれている。衣・食・住・家計、子どもの教育、世界の動き、環境・資源問題など、広い視野にたって考え、実践するために生活を足元から見直し、簡素で心豊かな暮らしを旨ざしている。両雑誌とも現在も出版されている。本論文は創刊の時期が早い『婦人之友』を調査資料とした。

(2) 方法

『婦人之友』の創刊号1908(明治41)年～1961(昭和36)年までの245冊の中から健康・看護の記事を検討した。そのうち創刊号から昭和16年までを刊行年に従い、1941明治後期(1903-1911)、大正期(1912-1925)、昭和初期(1926-1931)昭和初期(1932-1941)に分け、健康・介護に記事を整理し分析した。(巻末表4「婦人之友」記事参照)

結果

(1) 年代別記事の流れ

創刊号1908(明治41)年～1931(昭和6)年までに掲載されている健康・看護の件数は39件、筆者の職業は医師が延30名、看護師延9名であった。主な内容をキーワードで整理すると子供に関連する病気健康が中心であるが、婦人の健康や結核・伝染病の蔓延に対応する記事が多く見られた。家庭の健康管理者としての観点から健康な子を育てるという命題に込められている。

【表1】婦人之友 健康・看護に関する記事の内容のキーワード

	件数	主な内容のキーワード	筆者の職業と人数
明治後期(1903-1911)	6	小児 吸入 浣腸 便器 感冒	医学博士4、看護婦2
大正期(1912-1925)	18	耳の衛生、おたふくかぜ、肺結核の蔓延 家庭看護法 流産 婦人の健康法 創傷 腸チフスパラチフス 神経衰弱 老衰 子供の神経性体質 哺乳時における鉛中毒 伝染病 予防 疫痢	医学博士11、医師4 看護婦3
昭和初期(1926-1931)	15	長い病人 青年病「結核」 夜驚症 眼病 白癩 難聴 異 常児 麻疹 乳(乳から食べ物に移る病気) 微毒 予防注 射	医学博士9、女性医師 2、看護婦4

1 荏原順子：明治以降の看護の啓蒙教育 - 「家庭看護書」の変遷を通して - . 新潟青陵大学紀要, 2007 ; 7 : 115 - 129

- (2) 紙上講習としての家庭看護法の記事
看護師の執筆者による記事は、特集として
紙面を大きく取っているのは、紙上講習とし
- ての家庭看護法である。昭和初期までのものは4例あり、中期にも4例挙げられているので加えて8例とし分析した。

【表2】婦人之友 健康・介護に関する記事の内容

	号	執筆者	題	内 容
1	20巻(大正15年)11号	聖路加病院 河村郁子	紙上講習 家庭看護法	大切な病人の扱い方を疎かにしておいでの方が多。高等女学校で教えられる看護法もそうしたものが多。シーツ。衣服は厚くなく皺なく。洗髪・清拭の上手な仕方。聖路加病院の様子。
2	20巻(大正15年)12号	聖路加病院 河村郁子	紙上講習 家庭看護法	病床 寝床でお風呂『清拭・洗髪』
3	21巻(昭和2年)4号	聖路加病院 湯楨ます	家庭看護法 風邪を引いたときの注意	湿布の仕方 氷嚢の取り扱い方 湯たんぼと吸入器
4	21巻(昭和2年)5号	聖路加病院 湯楨ます	家庭看護法 長い病人の看護の仕方	病室と寝床 褥瘡の出来ないようにするには 食事に ついて 浣腸の仕方
5	35巻(昭和16年)6号	聖路加病院 小瀬村千代子	家庭看護法	病室 病室の温度と換気法 寝床をつくる ベッドの場合の湯具とその作り方 寝巻きの換え方
6	35巻(昭和16年)7号	聖路加病院 小瀬村千代子	家庭看護法 病室と病體の清掃法	口内清潔法 身體清潔法 ベッドの掃除 病室の掃除
7	35巻(昭和16年)9号	聖路加病院 小瀬村千代子	家庭看護法	出血の場合
8	36巻(昭和16年)6号	興健女子専門学校(聖路加) 前田アヤ	家庭看護法 病人の食事について	食欲のない病人のために 風邪を引いて熱が出たとき 胃腸病の場合 病人に喜ばれる流動食として 脚気の場合 腎臓病の場合

看護の目的や意味、心得等が表現されている項目を「看護の心得」、「疾病や症状の理解」、「看護技術方法の説明」、病室や病床などの清掃や整備の項目を「環境の整え」、「その他」の6つに分類し、表3に示した。

【表3】婦人之友 健康・介護に関する記事の内容

記事番号	1	2	3	4	5	6	7	8
	大正15年	大正15年	昭和2年	昭和2年	昭和16年	昭和16年	昭和16年	昭和16年
看護の心得								
疾病・症状の説明								
看護技術方法								
看護技術方法の根拠								
環境の整え								
写真や関連イラスト								

紙面や婦人の友社よりの依頼の内容にもよるが看護の目的や意味、心得等が表現されている項目を「看護の心得」に触れられているのが始めの2件であった。筆者の河村郁子は聖路加病院付属看護学校1期生で病院施療部の主任という立場であった。内容を見てみると病気に立ち向かう内的力を援助していくことや知識を得ることの前に必要なことが看護

の中にあることが述べられている。また、12号の看護技術の用い方においても「病人がほんとに気持ちよく休めて、身體の回復を楽しむやうに守ること」が前提であること、「看護の實を果たすために」は、「技術を識りそれに熟練をしなければならない」ということが述べられている。どちらも現在の看護や介護にも通じるものであるといえる。

【表4】河村郁子執筆の「看護の心得」の内容

	「看護の心得」の内容
20巻(大正15年)11号 看護の基本	私共看護婦としての養成を受けているものうちにも看護の真の根本精神を擲むことがむづかしいのではないかと思います。(中略)何よりも病氣にかからないやうにするのが第一ですが、不幸にして病氣になつた時にはさつそく看護が大切な仕事になります。醫者の役目は、藥を盛って病氣を壓倒することですが、看護の役目は、藥が利くまで病人の体力が続くやうに病人をいたわり、守ることです。(中略)(不明)じ、或は三十八度位に感じて過させることができるわけです。さうして病人の精神状態を豊かに守ることが醫者のとる治療の方法を助けてあまりあることは疑へません。これこそ看護法の真髓でなくてはならないことと存じます。(中略)聖路加病院の看護学校では始めの半年程も普通のハウスキーピングと変わらないやうな部屋を清潔にすること、その管理法台所を衛生的に保つておくなどの練習をさせておきます。(中略)病人の枕元にあるコップが曇つてあたり、シップの仕方がいつもぞんざいであつたり、シーツの皺がキチンと伸ばしていなかったりするのをみてもいろいろな知識をつめこまれてもそれがなんの誇にもならないことを感じます。
20巻(大正15年)12号 看護技術の用い方	看護法と申しましてそれは難しい理論ではないのでございます。病人がほんとに気持ちよく休めて、身體の回復を楽しむやうに守ることとございますから、家庭で病人が出来ましたやうな時も、お母様なりお姉様なりがその看病を致しますことは、看護の意義からみまして大變結構なことなのでございます。ただ看護の實を果たすために、どうしても技術を識り、それに熟練をしなければならないのでございます

また、「疾病や症状の理解」、「看護技術方法の説明」、「環境の整え」については丁寧に展開されている。特に記事番号4までの発行年が古いものほど細かな内容となっている。これは、写真の有無との関連も考えられる。特に必要物品や技術の方法は写真やイラストによって説明以上の表現力を果たすことは明らかである。

病室と寢床・ベッドの掃除などの「環境の整え」については「出血について」の記事以外は必ず触れている。「日当たりのよいさつぱりした室を當てるのが出来れば病人も気持ちよく、消毒などにどれだけ幸いかわかりません」(紙上講習 家庭看護法20巻(大正15年)12号)、「室は暖かくて陽あたりの

よい、換氣のよいところを選び湯気をたててよく湿氣をもたしておきます」(風邪を引いたときの注意21巻(昭和2年)4号)、「矢張り陽あたりのよい、新鮮な空氣の流通のよい部屋をえらび、裝飾もさつぱりとします。そして花なども餘り刺激の強くないやうな香や色のものをおいたりして、いつもきれいにし、病人の気持ちの轉換をはかるやうに氣をつけます」(長い病人の看護の仕方21巻(昭和2年)5号)、「せめて看護人の方で出来るだけのことをして寝たまゝでも朝のすがすがしさを味はせてあげることが出来るやうにしたいものです」(病室と病體の清掃法35巻(昭和16年)7号)などである。それは、当時の伝染病の流行に伴う看護としては重要な意味を持って

いると考えられる。

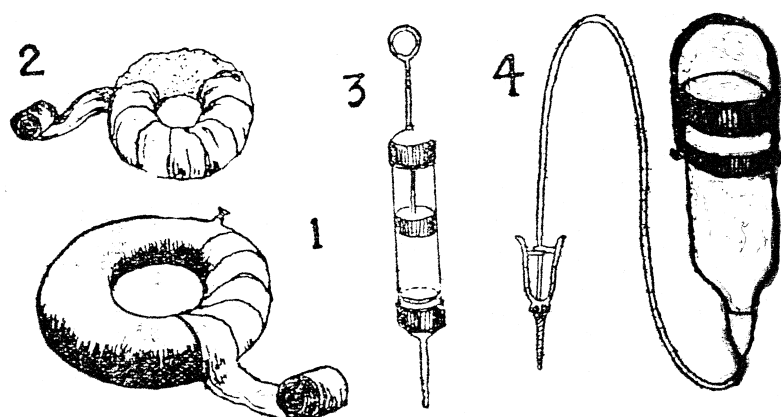
また、清潔（寝床でお風呂『清拭・洗髪』、口内清潔法、身体清潔法）食事（病人の食事について、食欲のない病人のために、風を引いた熱が出たとき、胃腸病の場合、脚気の場合、便秘の場合、腎臓病の場合、流動食）薬法（風邪を引いたときの注意、湿布の仕方、氷嚢の取り扱い方、湯たんぽと吸入器）褥

瘡予防、出血の対応場合、浣腸の仕方）「疾病や症状の理解」、「看護技術方法の説明」が文章で書かれていたが、「1、何々、2、何々」というような形式では書かれておらず、「まづ、……。次に……。次に……。」という形式である。後半の5件については写真やイラストの導入により理解しやすくなっている。

【表5】記事の中で使用された写真やイラストの内容

記事番号	4	5	6	7	8
記載年	昭和2年	昭和16年	昭和16年	昭和16年	昭和16年
内容	イラスト4点 (図1参照)	写真8点	写真1点・イラスト6点	写真1点	写真5点
	1. ラバーリング 2. 綿で作る円座 3. グリセリン灌腸器 4. 石鹼灌腸器	1. 病室とベッド 2. 口内清潔物品（綿棒、コップ、脳盆、タオル硼酸水） 3. 清拭物品（タオル類、金盥、石鹼、アルコール、亜鉛化軟膏） 4から7. 人形を使った清拭法 8. ベッドの掃除	1. ベッドメイキングをしている写真 2. 三角コーナーの作り方イラスト4点 3. シーツの折り込み方イラスト2点	家庭に備える救急箱と物品	お盆や食器にのせた食事5点

【図1】昭和2年の記事の中のイラスト



考 察

1 病院での看護法がそのまま紹介

全体を通して、医師による医学の知識の紹介と同じように、看護の側からも病院での看護をそのまま紹介する方法が取られていることが分かる。

しかし、読み手にあわせて内容を工夫するというよりは、病院での看護法がそのまま紹介しており、「ベッドメイキング」や「サンルームでの日光浴」、「バスブランケットの準備」というようなおそらく一般の読者には伝わらない表現であるし、図入りで紹介されている浣腸器も、病院で使用されている器具そのままであり、石鹼浣腸やグリセリン浣腸の施行方法も紹介されている。また、ベッドについても「聖路加で使っておりますのはバネのやわらかい鋼鐵性にエナメルを塗った寝臺で消毒などにも都合よく足に車がついていて自由に動くので大變便利です」(35巻(昭和16年)6号)と推奨しているが、当時の庶民の生活には、そぐわない物である。

2 看護技術の裏づけ

「疾病や症状の理解」、「看護技術方法の説明」を見ていくと、雑誌なので字数の制約はあるが、なぜそうなのか、なぜそうするのかという記述が多く見られる。その背景として、『婦人之友』の意向もあるが、執筆者の考え方もある。湯槇²は「介護技術の方法を教えようとした従来の看護婦養成に対して、聖路加では「なぜそのようにするのか」という理論的な説明まで掘り下げての教育があったと思う」(聖路加看護大学50年史、1970年)と述べている。このことから、聖路加看護専門学校では、創立当初から、看護技術の裏づけとなる医学や科学の知識、または川島のいう「客観的法則性」に基づく教育がなされていたという事が執筆の内容に影響していると考えられる。しかし、執筆者となって、それを一般の家庭に応用する際には、病院での看護の内容をそのまま紹介するという事に終始しており、物品器具などは一般家庭にないも

のが多く、家庭で生かすにはどうしたらよいのかという記述はみあたらない。

まとめ

(1) 明治期後半の良妻賢母教育と羽仁もと子

これまでの研究の「家庭看護書」においては、主婦は家庭の健康管理の役割を担わされていたこと、家庭の管理者としての主婦に必要な家庭看護法の啓蒙が求められ、出版にいたったという経過がある。

1887(明治20)年以降に確立し始めた良妻賢母教育を背景として、育児などととも家庭での看護が重要な意味合いを持っていた。

しかし、羽仁もと子は独自の主婦のあり方を主張している。家庭のあり方として「独り一家の主人にのみ生活の全部の責任を負わずに、家人のすべてがその労作を家庭に献ずるといふ考えになること」が必要であるとのべている。女中の手をかりず主婦自ら労働をすること、必要ならば内職をすること、子供にも相応の手伝いをさせること等である。今は、出来ないことであっても、向上の希望を持ってなせばいつしか必ず発展すると述べている。「手芸・裁縫・料理・看護は楽しんで親切に出来るような修行をしてもらいたい」それは女性だからとか良妻賢母というものとは違うと断言している。派出看護婦を頼むことよりも自分で看病をしたいと思うこと、そのことに女性としての本能の中に深く植えつけられている様々な望みを満足させるものがあると述べている。「看護法が一番よい先生は、風引きでもかすり傷でも、その時々³の家人の健康上の故障です。そこに常に気をつけて心の中に蓄えていた知識や思いを応用する愛と骨折りをさえ惜しむことがなかったなら、それからそれと色々³と学問をすることが出来るのです。講習会も展覧会も月々のよい雑誌もこういう人のためには大きい進歩となるのです」

このことから、記事が医学・看護の知識の紹介に終始していることや看護技術の裏づけが述べられているのは、主催者の羽仁もと子

2 湯槇ますは、聖路加の看護専門学校に1921(大正10)年9月に入学した。

3 羽仁もと子、若き姉妹に寄す、近代日本女子教育文献集第22巻、日本図書センター1984 305 308

の考え方の影響が大きいと考えられる。

(2) 「正しい醫學知識の必要性」に見られる
看護知識の啓蒙

大正7年の「近代医醫學を尊重せよ」(理学博士 谷津直秀 12巻7号)では、「素人療法の危険」というサブタイトルで以下の内容が述べられている。「専門知識のないものが、浅薄な事故の経験を基にして、何々は能くきくと独断して、他に強いと伝ふことは實に危険千萬であります。それは丁度新しく発見された薬を、動物試験をも経ないで、人間に與へると同じ結果だと思ひます。(中略)かく日進月歩の醫學を無視して、千に一つ當るやうな素人療法を實行するとは、餘りに無智な話であります。殊に主婦たるものが素人考への療法に迷はされて、不合理な事ばかりを敢えてするやうでは危険至極で、その及ばず禍害が更に甚だしいと思ひます。」という内容である。

当時の医療状況として、医学では漢方医と西洋医の対立の中から生まれてきた西洋医の組織が医師法の公布で法制化された(1906; 明治39年)時期である。これまで経験的に行われてきた家庭看護に科学的な医療の見方考え方をわかりやすく啓蒙していく必要が出現してきたのであった。2つめは当時の伝染病の流行と貧困である。医療技術の対象は急性伝染病であり、1897(明治30)年には伝染病予防法が発令された。この頃の看護婦教育においては、1899, 1900(明治32, 33)年頃の赤痢の大流行、1900(明治33)年のペストの流行のもとに、各府県で速成看護婦の養成が行われた。これは、約3ヶ月の速成養成であったが、市町村レベルで組織的に実施され卒業生は伝染病隔離病舎での看護や患家への派出看護に従事した。また、各地で看護婦の養成がおこなわれ、いくつかの看護婦養成所では、養成とは別に一般向けに看護学の講習を行っている。つまり、当時の家庭には看護婦を雇い入れることもあったが伝染病の大流行もあり、雇い入れることのできない家庭もあった。そのような中で「婦人之友」の読者層は新しい主婦としての観点から看護法を学びとろうとしていたのである。

(3) 伝染病は貧困層の病気としていること

「婦人之友」の記事と当時流行した伝染病との関連を時代を追って見てみる(巻末表4)と当時流行した伝染病との関連が薄いことがわかる。「伝染病は貧困層の病気」(大正3年)としていることから中産階級以上の主婦には、それほど大きな問題がないのだろうか。これについては明確にはならなかった。

おわりに

本稿では、明治期からの雑誌「婦人之友」の記事を辿り、看護知識の啓蒙の内容及び背景を分析した。

看護が主に家族で行なわれていた時代の中で、病院や看護教育の場で行われていた知識が雑誌によって紹介された。家庭で行なう看護では、家族のために行うことが自己の成長のためであるという羽仁もと子の主張も時代を反映しているものであった。明治初期からの伝染病の絶え間ない流行、高い乳児死亡率に対して、民間療法や祈禱などに頼っていた家庭に対して、「女性だから」「良妻賢母として」ではなく自分の生き方として料理、裁縫、看護などの知識を吸収するという観点は思いもよらなかった。医学や看護の知識を筆者のほうが噛み砕いて伝えるということより、受け取る側の読者の学ぼうとする主体性を大切にすることこそ意味があることは大きな問題提起であった。

今後の課題としては今回明確に出来なかった「婦人之友」の記事と当時流行した伝染病との関連の薄さについて追求したい。また、同時期に出版されている雑誌「家の光」についても研究を進めたい。

引用文献

- 1) 『婦人之友』の創刊号1908(明治41)年～1961(昭和36)年まで
- 2) 羽仁もと子．若き姉妹に寄す．近代日本女子教育文献集第22巻．日本図書センター；1984 305-308

参考文献

- 1) 平尾真智子『資料にみる日本看護教育史』(看護の科学社, 1999) p. 76
- 2) 日本家政学会編．家政学原論．朝倉書店, 1990；PP. 32 - 52
- 3) 平尾真智子．資料にみる日本看護教育史．看護の科学社；1999 P. 10
- 4) 亀山美知子．近代日本看護史，看護婦と医師．；ドメス出版, 1985 P. 210
- 5) 聖路加看護大学．聖路加看護大学50年史；1970年
- 6) 女性史総合歴史研究会．日本女性生活史 第4巻．東京大学出版会；1969年
- 7) 斉藤道子．羽仁もと子一生涯と思想．ドメス出版；1992年
- 8) 紀田順一郎．明治の群像9 明治のおんな；三一書房, 1969年
- 9) 毛利子来．現代日本小児保健史；ドメス出版；1981年
- 10) 新村拓．老いと看取りの社会史．法政大学出版局；1991年
- 11) 一番ヶ瀬康子監修．生活文化を支える介護．一ツ橋出版；1998年
- 12) 中島みさき．『近代家族』への問いと女性史の課題．歴史評論．校倉書房；1999. 4
- 13) 橋本紀子．ジェンダーと教育の歴史．川島書店；2003年
- 14) 志賀匡．日本女子教育史．琵琶書房；1977年
- 15) 総合女性史研究会．資料にみる日本女性のあゆみ．吉川弘文館；2000年
- 16) 清水美智子．<女中>イメージの家庭分化史．世界思想社；2004年
- 17) 平塚益徳編著．人物を中心とした女子教育史．帝国地方行政学会；1965年

【巻末表6】「婦人之友」記事

	婦人之友	社会・疾病の状況
1巻 (明治41年)	<ul style="list-style-type: none"> ・子供と体温・小児と便通・小児と尿水・夏季における小児と生活 医学博士 加藤照麿 ・吸入法の心得・浣腸法の心得・便器の扱い方改良したる三角おむつ 大関和子 	<ul style="list-style-type: none"> ・富国強兵のための人口政策として墮胎、間引きが激しく禁じられた。国民の大多数の窮乏にかかわらず人口の急激な増加の時期
3巻 (明治42年)	<ul style="list-style-type: none"> ・湿布の仕方大関和子 ・浣腸と洗腸 医学博士 加藤照麿 	<ul style="list-style-type: none"> 明治9年 東京府病院・大阪医 ・学校で産婆養成開始 ・コレラ・天然痘・ジフテリア赤痢・疫痢などが流行
5巻 (明治44年)	<ul style="list-style-type: none"> ・子供と感冒 医学博士 加藤照麿 	<ul style="list-style-type: none"> ・西洋式の小児科学が導入される。育児の技術と思想の勃興・学校衛生に影響
6巻 (明治45年)	<ul style="list-style-type: none"> ・子供と入浴 呼吸器官としての皮膚 	<ul style="list-style-type: none"> 明治14年 流行病ある節貧民救療費支弁方布達
7巻 (大正2年)	<ul style="list-style-type: none"> ・学童自動の耳の衛生 子供のおたふく風邪 	<ul style="list-style-type: none"> 明治25年 同志社病院、巡回看護制度を採用 ・乳児死亡率の増加、疫痢・肺炎・脚気・結核などの疾病の増加
8巻 (大正3年)	<ul style="list-style-type: none"> ・肺結核の蔓延と放縱なる生活、<u>下層の貧民階級に蔓延</u> ・どんな子供が健康な子供か 	<ul style="list-style-type: none"> 大正2年 東北・北海道地方で大凶作、青森・北海道では米穀の収穫量が平年の10~20%で救済を要する人口が973万人と発表。
9巻 (大正4年)	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭看護法としてのマッサージ きみ子 ・流産の原因とその応急手当 	<ul style="list-style-type: none"> 大正3年 東京で発疹チフスが発生各地に流行、年末までに死者1176人。 大正4年 婦人の友社が家庭用の仕事着「かっぱう着」を考案、普及が始まる。
10巻 (大正5年)	<ul style="list-style-type: none"> ・婦人はどうしたら健康になれるか 東京女子医学専門学校 吉岡弥生(昔より今のほうが頭を使うことが多くなり体を使わなくなった) ・婦人に特別な健康法 医学士 佐久間謙信 ・いかなる状態を健康というか 医学博士 廣川松太郎 	<ul style="list-style-type: none"> 大正5年 横浜へ入港した布圭丸の乗客にコレラが発生全国的に拡大、死者7482人。 大正6年 ・三重県神前村農繁期託児所事業開始 ・「主婦の友」創刊
12巻 (大正7年)	<ul style="list-style-type: none"> 近代医学を尊重せよ 理学博士 谷津直秀、・家庭の手不足を補うための派出会 	<ul style="list-style-type: none"> 大正7年 ・富山県で米価高騰防止のため、県外への米の積み出しを妨害、米騒動始る。 ・第1次世界大戦が終結、戦争による死者が1千万人。
14巻 (大正9年)	<ul style="list-style-type: none"> ・女中難、女中がいやになる訳 	<ul style="list-style-type: none"> ・巡回産婆、妊婦相談 ・所市町村、公益団体、産婆組合などにより設置
15巻 (大正10年)	<ul style="list-style-type: none"> ・創傷の生理的療法とその批評 創傷の生理的療法 医学博士 茂木蔵之助 ・腸チフス及びパラチフス 慶応医科大学教授 医学博士西 野忠次郎 ・風と肺炎 医学博士 廣川松太郎、 ・赤坊に及ぼす牛乳の危険性 医学博士 豊福環 ・子供のみ潜伏している結核 医学博士 廣川松太郎 ・医師の謝礼及び診察料の振合い 	<ul style="list-style-type: none"> 大正9年 大日本医師会、細民 ・衛生改善につき巡回産婆、看護婦の設置を床次内務大臣に答申
16巻 (大正11年)	<ul style="list-style-type: none"> ・どうして神経衰弱に罹ったか及びどうしてそれを癒したか 	<ul style="list-style-type: none"> 大正11年 健康保険法を公布、1926/7/1施行される。
17巻 (大正12年)	<ul style="list-style-type: none"> ・老衰の生理 医学博士 小酒井光次 ・子供の神経性体質 医学博士 豊福環 	<ul style="list-style-type: none"> 大正12年 関東大震災死者9万1344人、家屋の全壊焼失46万4909戸直後再生会病院巡回看護婦により罹災者の家庭訪問

	婦人之友	社会・疾病の状況
18巻 (大正13年)	<ul style="list-style-type: none"> ・哺乳時の取り扱い 子供の肺炎 医学博士竹内薫兵 ・帝大セツルメントを見る 内藤貞子 ・神経質の体質 医学博士竹内薫兵 / 老人に対する12の注意 	大正13年 大阪市に訪問看護婦「中産階級以下の家庭の出産に応ず
19巻 (大正14年)	<ul style="list-style-type: none"> ・脳の発達と老衰医学博士 下田光造 ・生活と医学(哺乳時における鉛中毒・耳の病気 扁桃腺 目の病気・伝染病をいかにして予防すべきか) 	
20巻 (大正15年)	<ul style="list-style-type: none"> ・チフス。疫癘をいかに予防すべきか ・肺結核の対策3篇 ・紙上 家庭看護法 聖路加病院川村郁子 1から2 	
21巻 (昭和2年)	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭看護法 聖路加病院 湯槇まつ子 ・長い病人の看護の仕方 聖路加病院 湯槇まつ子 ・現代病 神経衰弱について 医学博士 杉田直樹 ・青年病『結核』医学博士 平井文雄 ・家庭医学と家庭科学(夜驚症、婦人と子供の眼病、湿疹と白癬、妊娠中起こる全身の病気・難聴はどうしてくるか、帝王切開術の進歩、怪我の手当て、育児問答録) ・家庭医学と家庭科学(夜驚症、婦人と子共の眼病、湿疹と白癬、 ・妊娠中に起こる全身の病気、難聴はどうしてくるか・帝王切開術の進歩、怪我の手当て、育児問答(私の工夫した大工道具電灯要録) ・子供の体質を弱くする病気 医学博士 鎮目千之助 ・小児期の分類とその死亡率 医学博士 田村均 	昭和2年 <ul style="list-style-type: none"> ・中央結核予防会巡回看護婦制度の年に設立を建議 ・花柳病予防交付 ・保健婦養成講習所開設 ・農村季節託児所の設置多し <ul style="list-style-type: none"> ・金融恐慌 全国的に銀行取り付け激化、銀行休業。
22巻 (昭和3年)	<ul style="list-style-type: none"> ・乳から食べ物に移る病気 吉岡弥生 ・高齢者に来る圓嫉患 医学博士 高野六郎 ・母乳の足りないとき 吉岡弥生 	昭和3年 <ul style="list-style-type: none"> ・昭和天皇即位の礼
23巻 (昭和4年)	<ul style="list-style-type: none"> ・恐ろしい微毒のはなし 医学博士 笹川正男 ・健康座談会 ・異常児論 医学博士 下田光造 	昭和4年 <ul style="list-style-type: none"> ・世界恐慌が始まる。
24巻 (昭和5年)	(村を飛びまはる黒衣の天使)	
25巻 (昭和6年)	<ul style="list-style-type: none"> ・麻疹の感染と予防注射・医学博士・田村均 ・乳児の便に関する知識 医学博士 小山武夫 	昭和6年 <ul style="list-style-type: none"> ・満州事変起こる。

毛利子来 現代日本小児保健史 ドメス出版 (1972)を参考に筆者作成